

「至誠」という信念



アフラック生命保険社長 古出眞敏
こいで まさとし

私は、1998年10月に日本長期信用銀行が経営破綻で国有化されたのを機にアフラックに転職し、財務部で資産運用を担当していた。2000年に入ったある日、統括法律顧問・コンプライアンスオフィサーのチャールズ・レイクさん(現在、代表取締役会長)からランチに誘われた。私は銀行時代米国のロースクールに留学し、法務部で国際法務の経験もあったので、社内にそういう経歴の社員がいることに興味を持ったのだろう。その後、レイクさんから、「新設するコンプライアンス・検査部の部長になってもらいたい」と話があった。保険業務の経験のない私にコンプライアンス・検査部長が務まるか不安もあったが、経験豊富なスタッフを揃えるからと言われ、思い切って引き受けた。

明確に意識するようになったのは、これがきっかけである。コンプライアンス・検査部長として、またレイクさんが副社長になった時に引き継いだ統括法律顧問・コンプライアンスオフィサーとして、役職員、規制当局、代理店などの社内外のステークホルダーとコンプライアンスに関して難しい局面になることもあったが、「至誠」という信念をよりどころとすることによって、ぶれることなく行動することができた。その結果、一時的に意見が対立することはあっても、長い目で見れば、ステークホルダーからの信頼を獲得することができたのではないかと思う。

その後、経営全般に携わることになり、2017年7月から社長を務めているが、この間もずっと「至誠」に基づき仕事をやってきたつもりだ。今振り返ってみると、この20年あまり「至誠」に基づき行動してきたことが、自分自身にとってだけでなく会社にとっても良い結果を導いてきたと強く実感している。今、社員とのタウンホールミーティング(対話集会)で、「社長として大切にしていることは何か」という質問を受けることがあるが、そのときはさすが「至誠」と答えている。